

## 第2次世界大戦下の日本におけるクロアチエ思想の受容

國 司 航 佑

〈Sommario〉

Nella *Kike Wadatsumi no koe*, celebre raccolta di testamenti di giovani soldati giapponesi caduti nel corso della seconda guerra mondiale, compare più di una volta il nome del grande filosofo italiano Benedetto Croce (1866-1952). Il pensiero liberale di Croce e la sua vita da studioso indipendente sembrano costituire un efficace sostegno per lo spirito di quei giovani andati incontro alla morte senza aver avuto la libertà di esprimere la propria opinione. Come mai quel pensatore era conosciuto in quest'ambiente? Nel presente articolo, soprattutto attraverso un'analisi del lavoro di Goro Hani, autore del famoso volume *KUROCHE* (1939), si cercherà di delineare il processo della diffusione del pensiero di Croce in Giappone durante la seconda guerra mondiale.

は じ め に

『きけ わだつみのこえ』は第2次世界大戦末期に戦死した学生たちの遺書を収録した記録集であるが、そこに「羽仁五郎の『クロアチエ』を読んで」<sup>1)</sup>と題された次のような文章がある。

クロアチエの偉いところは学問を信じ多くの人のために尽くすということを考えていたことだと思います。学問の独立という言葉があるけれどそれに徹するということはたいへんむずかしいことだと思います。クロアチエという人はほんとうにそれを信じそれを守った人でした。平和なときは空論と見えないものだから学問の独立と有用な言葉も随分繁昌したけれども、現代のような異常な時代になると、空論なんか出る余地がなくなりみんなあまりそういうことを言わなくなりました。もともと本気でいっていたわけではないでしょうからあたりまえだけれど、たいへん情けないことだと思います。

クロアチエの偉いところは、その議論とゆうより、そういう時代にもなお、ビクともしない彼の学問的信念だと思います。(日本戦没学生記念会 1982: 18-22)

この文章の書き手は、フィリピンにて戦死した吉村友男(早稲田大学文学部出身)である。そしてここで吉村が言及している「クロアチエ」<sup>2)</sup>とは、イタリアの大哲学者ベネデット・クロアチエ(Benedetto Croce, 1866-1952)<sup>3)</sup>のことである。吉村は、「学問の独立」を実践したクロアチエの学者としての態度を称賛している。

『きけ わだつみのこえ』におけるクロアチエへの言及は、実はこれに限らない。いわゆる神

風特攻隊の一員として戦死した上原良司（慶応義塾大学経済学部出身）の「所感」にも、クローチェの名が見られる。

思えば長き学生時代を通じて得た、信念とも申すべき理論万能の道理から考えた場合、これはあるいは、自由主義者といわれるかもしれませんが自由の勝利は明白な事だと思います。人間の本性たる自由を減すことは絶対に出来なく、例えそれが抑えられているごとく見えても、そこにおいては常に闘いつつ最後には必ず勝つという事はかのイタリアのクローチェも言っている如く真理であると思います。（日本戦没学生記念会 1982: 268-270）

吉村が偉大な学者としてクローチェを評価していたとすれば、上原は（当時、一種の危険思想とみなされていた）自由主義の拠り所としてクローチェを称揚しているといえるだろう。

上原の文章を吉村の遺書と併せて考えたとき、戦前の我が国において、クローチェという人物が——偉大な学者としてあるいは自由主義者として——独特な存在感を放っていたことが分かる。一体どのようにして、クローチェの思想が彼らに届いたのだろうか。この問題を考えるとき鍵になるのは、吉村が言及している『クロオチェ』という著書と、その作者羽仁五郎であろう。上原は別の遺書の中で自分の「遺本」の存在に言及している（日本戦没学生記念会 1982: 14）が、実はその「遺本」がまさに羽仁の『クロオチェ』であったことが近年の研究で明らかになっている（中島編 2005）。

以上を踏まえ、本稿では、とりわけ羽仁五郎の仕事に注目しつつ、第2次世界大戦下の日本においてクローチェの思想が重要な位置を占めるに至った経緯の一端を明らかにすることを試みたい<sup>4)</sup>。

## 1. 羽仁五郎のクローチェとの出会い

まず羽仁五郎とは何者か。そのことを確認するためには、彼の自伝『私の大学』が参考になる。羽仁（旧姓森）五郎は、1901年群馬県桐生市に生まれた。1921年東京帝国大学法学部に入学するが、提供された授業に満足できなかったという。羽仁は、その頃友人の紹介を通じて知った新カント学派の歴史哲学に強い興味を抱き、休学してヨーロッパに旅立った。新カント学派の泰斗ハインリヒ・リッケルト（Heinrich Rickert）が教鞭を取るハイデルベルク大学に留学したのである。そしてその留学期の最後に彼が出会ったのが、クローチェの哲学であった。

ハイデルベルク時代の最後に、ドイツ哲学の新生の方向をもとめていたぼくは、クロオチェに到達した。すべての歴史は現代の歴史である、というクロオチェの歴史哲学は、ぼくのもとめていたものであった。（羽仁 2001: 150）

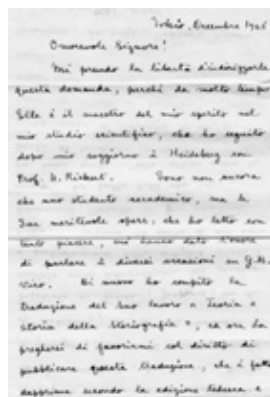
具体的な経緯は明らかになっていないが、羽仁がハイデルベルクを離れるのは1923年のことであるから、彼がクローチエ思想に初めて出会ったのは、1922年末から翌年にかけてのことと推察される<sup>5)</sup>。

羽仁が最初に読んだクローチエの作品がなんであったかはここに述べられていないが、1939年に羽仁がクローチエに送った手紙<sup>6)</sup>に手掛りのとなる文がある。

あなたの『実践の哲学』を読んだ時から何年の月日が流れたでしょう。あの体験によって、私は生きることと学ぶことの楽しみを信頼するようになり、その後あなたの重要な『歴史叙述の理論と歴史』を翻訳することになったのです。(RLAM: 101)

手紙に書かれた文言をそのまま事実とみなすことはできないが、この場で虚偽を述べる理由もないはずだから、羽仁が最初に読んだクローチエの作品はおそらく『実践の哲学』だったとみてよいだろう。より確実なのは、1926年の手紙にある「すべての歴史は現代の歴史である、というクローチエの歴史哲学」が、クローチエ歴史学を代表する作品『歴史叙述の理論と歴史』の内容を指しているということである。羽仁は帰国前にヨーロッパ各地を旅行し、ナポリまで行ったがクローチエを訪ねる勇気が持てなかったという。が、いずれにせよ、彼がこの時期クローチエの『歴史叙述の理論及び歴史』の翻訳を開始していることが分かっている(羽仁2001: 150)。

実のところ、『歴史叙述の理論及び歴史』は、まずドイツで発表され(*Zur Theorie und Geschichte der Historiographie*, Tübingen, Mohr, 1915)、その後イタリアで発表されたものである(*Teoria e storia della storiografia*, Bari, Laterza, 1917)。羽仁はドイツ語版でこの作品を初めて読んだはずだが、翻訳に際してはイタリア語版を参照しつつ、オリジナルの文意を反映しようと試みたらしい。その証拠に、当時羽仁がクローチエに送った手紙に、ドイツ語版と英語版を底本にしつつも、イタリア語版を読み込み、修正を施していた旨が記されている(「まずはドイツ語版および英語版に沿って翻訳し、その後、原語の版を基に修正を施した」とある写真1参照)。その後、紆余曲折あったようだが、1926年羽仁の翻訳は岩波書店から出版される。



[写真1] 『歴史叙述の理論及び歴史』の出版許可を求める手紙<sup>7)</sup>

## 2. 『歴史叙述の理論及び歴史』とその日本語訳

羽仁の訳書が及ぼした影響について考察を加える前に、クローチェの哲学と『歴史叙述の理論及び歴史』(*Teoria e storia della storiografia*)という作品そのものについて、一言説明しておく必要があるだろう。クローチェは1900年代初頭いくつかの重要な哲学書を出し、哲学者としての輝かしいキャリアを開始した。クローチェの哲学は、人間の精神を研究対象とするものである。そしてそれは、精神の働きをまず「認識的活動」および「実践的活動」に二分し、次にそのそれぞれをさらに二分する(「直観的認識」と「論理的認識」、ならびに「経済活動」と「倫理活動」)。クローチェ思想を基礎づけるこの四区分の体系は、「精神の哲学」と名付けられた。クローチェは、これら4つの精神の活動について、『表現の学および一般言語学としての美学』(1902年、以下『美学』と略記)、『純粹概念の学としての論理学』(1909年、以下、『論理学』と略記)、そして『実践の哲学— 経済学と倫理学』(1909年、以下、『実践の哲学』と略記)という3つの著書のうちに論じていた。『美学』において「直観的認識」が、『論理学』において「論理的認識」が、そして『実践の哲学』において、「経済活動」と「倫理活動」とが、それぞれ議論の対象となり、この3作を通じて「精神の哲学」の体系が完成したのである。

「精神の哲学」が完成をみたのと時期を同じくして、クローチェは1909年にドイツの出版社Mohrからの歴史哲学に関する入門書の執筆の依頼を受けた。そこでクローチェは、自らの歴史哲学に関する研究を深め、その成果を、一旦完結させていた「精神の哲学」に加わる第4の書として発表した。これが件の『歴史叙述の理論及び歴史』である。その序文にも記されているように、先立つ3作品が精神の4形式のうちの1つあるいは2つを対象としていたのに対して、『歴史叙述の理論及び歴史』は『論理学』の一部を深化させたものであると同時に、「精神の哲学」全体の結論としての性格を帯びている。クローチェにとって、「歴史」の営みは「哲学」の営みと同一である。なぜなら、それ自体では何の意味を持ちえない「出来事」を「歴史」に高めるのは、我々(=歴史家)の精神であり、その限りにおいて「歴史」と「哲学」とには、「概念」を通じて「事物」を整理する、という共通の性質が見出されるからである。「死した過去」は、歴史家の精神のうちで命を吹き込まれることによって初めて「歴史」となる——「全ての真の歴史は現代史である」(TSS: 12)という著名な文句は、このような理論に裏付けされたものであった<sup>8)</sup>。

以上『歴史叙述の理論及び歴史』の概要について確認した。その上で、羽仁五郎による翻訳について見ていこう。この書は、当時の様々な学者たちの目に触れ、多様な反応を引き起こしている。羽仁自身の回想によれば、岩波書店の企画に関与していた和辻哲郎はその原稿を読んで「理解できなかった」(羽仁2001: 180)らしい。京都学派を代表するこの哲学者に対して、クローチェの歴史思想は大した影響を与えなかったようである<sup>9)</sup>。同じ京都学派でも、三木清は『歴史叙述の理論及び歴史』をかなり高く評価している。というのも、三木清こそが、当該訳書出版に

向けた便宜を図り、原文解釈の面でも羽仁をサポートした人物だったからである<sup>10)</sup>。ただし、羽仁と三木とはハイデルベルク大学の学友であったから、こうした人間関係の中で三木のクローチェ受容を理解するべきかもしれない。1932年に出版された三木の『歴史哲学』においてクローチェに言及される箇所はかなり限られていることから、三木がクローチェから受けた影響を重大なものだったと見ることは難しい。

### 3. 平泉澄とクローチェ

こうした事例に比べ、クローチェ思想からの影響を明らかに見て取れるのは、日本史学者の平泉澄（1895-1984）においてである。平泉はいわゆる皇国史観を代表する歴史学者であり、彼は1920年代から1940年代にかけて東京帝国大学で教鞭を取った。実は、そこで指導した学生のうちに羽仁がいた。平泉は、羽仁によって『歴史叙述の理論及び歴史』が翻訳されたことに感銘を受け、1926年、「クローチェ『歴史叙述の理論及び歴史』の邦訳を得て」と題した書評を発表している。平泉はその冒頭で、当時の歴史学界のあり方を概観しその問題点を指摘する。

凡そ歴史ほど広く学ばれてゐて、しかも深く「考え」られてゐない学問はあるまい。之に就いて研究してゐる人は極めて多く、それに就いて博智識を得、高い見解を立て、ゐる学者も随分多い。しかも一体歴史とは如何なる学問であるか、いかなる道を進むべきものであるかという様な根本的な問題に至つては、一般には殆ど閑却せられ、無視されてゐるように思はれる。（平泉 1998a: 61）

ここでは枝葉末節に専心して歴史学の本来の目的が見失われている学界の傾向が批判されている。このような場合、哲学者の歴史論が参照されることがしばしばあるが、平泉はそうした動きにも問題があると言う。

こゝに目をつむつて史林の落葉を貪り拾ふに能わず、血路を天の一方に開かんとするものは、道を哲学者に聴かうとする。しかるに哲学者は星斗を抱いて天空に翔り、地上の事物を知る詳細ならざるが故に、その論はあざやかであり、その調は高いけれども、実際史林の荆棘をきりひらいて史家の進路を指示するに適切でない。かくて史学の若き探求者は、天に微かなる星の光を仰ぎつゝ、地に茂る密林の間を彷徨する。星の光は微なるが故に見失ひ易く、森の茂みは深きが故に迷い勝である。（平泉 1998a: 61-62）

修辭が多く一見難解な文章だが、ここではつまり、いわゆる「哲学者」の歴史論は歴史学の現実に即していないことが多いため、「地」（実証的な歴史）の道が険しいからといって、「天」（哲学）に頼ることもできない、という現状を説明している。そして平泉は、クローチェ思想こそが

道を示すものだとして、これを礼賛している。

もしかくの如くにして手足荆棘に刺され、目くるめき息喘ぐものあらば、隻手の血を洗つてクロォチェを読め。(平泉 1998a: 61-62)

平泉の言葉は、クローチェ思想に対する手放しの賛辞である。続く箇所では、平泉は『美学』、『論理学』、『実践の哲学』を既に読んでいたことを述べているので、彼は羽仁を通じてクローチェを知ったとは言えない<sup>11)</sup>。しかし、『歴史叙述の理論及び歴史』に示されたクローチェの歴史観に強い影響を受けたことは確かである。

平泉はその後クローチェの思想を支持し続け、1930年10月にはナボリのクローチェ宅を訪れている<sup>12)</sup>。後年平泉が書いた「ナボリの哲人」と題された回想録によれば、彼がクローチェを訪問した理由は、「歴史と哲学との一致融合」、「マルクス唯物史観の排斥」(平泉 1998b: 479)という2つの点において、クローチェ思想に深く共鳴していたからだという。しかしこの時期には、クローチェがファシズムに反対する意思を表明する一方で、もともと愛国主義者であった平泉はさらに右傾化を強めていた。すなわち、両者の間には政治信条からは相容れないところが多かったはずであるが、それにも拘わらず平泉はクローチェの思想に変わらぬ親しみをもち続けたのである。

実は、ある意味では平泉のケースと反対の現象が、羽仁五郎に生じていた。羽仁は、ヨーロッパ留学から帰国した後、東京帝国大学の日本史学科に入り、日本史の研究に勤しんだのだが、それは「日本の民衆の問題」(羽仁 2001: 155)を掘り下げようとする問題意識とつながるものであった。羽仁は徐々にマルクス主義的な傾向を強め、1928年、三木清と共に雑誌『新興科学の旗の下に』を創刊し、一躍日本のマルクス主義歴史学者の旗手となった。ところが、平泉が自らのマルクス主義批判の論拠にしたことから分かるように、クローチェはマルクス主義批判の代表者として知られた人物でもある。そして一方の羽仁はマルクス主義者になった後も変わらずにクローチェを崇拝し続けていることから、羽仁のクローチェ受容にも不可解な点が残る。

羽仁のマルクス主義への接近と反比例するように、彼と平泉の距離は開いていく<sup>13)</sup>。ファシズムにもマルクス主義にも反対の立場を取っていたクローチェの思想が、左右両極に位置する歴史家によって受容されたことは興味深い事象である<sup>14)</sup>。これは、クローチェの思想が現実社会に応用されたとき、様々な化学反応を起こすものであることを示しているのだろうか。もっとも、クローチェの歴史観そのものが歴史の「現代性」を強調しつつ歴史家の解釈を重視するものであったから、その受容者が自らの価値観から歴史を論じたことは、ある種自然な現象だったと言えるかもしれない。いずれにせよ、クローチェは1930年代に、ファシズムとマルクス主義の両者に対立するものとして、自らの自由主義を強調するようになる。そしてその声を日本語で代弁したのは、羽仁五郎の方であった。



#### 4. クローチェの自由主義と羽仁五郎の『クロオチェ』

クローチェの自由主義思想は、1930年代から前景化されてくるものである。イタリアでムッソリーニのファシズムが台頭するのは1920年代のことであったから、クローチェの自由主義には純粹に哲学的な動機を越えリアクションとしての要素が強くなる<sup>15)</sup>。1925年の「反ファシスト知識人たちの宣言」を起草した後、クローチェはファシズムに反論する術として自由主義を提起し始めているが、それは彼の歴史主義と深い関係を持つものであった。クローチェは、1930年にオクスフォードで開催された世界哲学大会にて「反歴史主義」と題した講演を行っているが、そこには彼の自由主義の最初の言明がなされる。クローチェは、反歴史主義を、(過去を完全に忘れ去ろうとする) 未来派的反歴史主義と、(歴史の展開を認めずある特定の時代に理想とする) 古典主義的反歴史主義とに分類し、その両者ともが一種の病的な性質を抱えていると批判した上で、以下のように論じる。

こうした病的性質について、反歴史主義と同時に観察され、内的には反歴史主義と一体をなすもう一つの事実の確認をすることができる。それはすなわち、自由主義思想の頹廢である。[...] 歴史の感情と自由の感情とは、実のところ、不分離なものである。それは、歴史については《自由の歴史》という定義以上に適切な定義がなされたことはないほどである。何故かといえば、自由によって初めて歴史の意味が理解されるのであり、自由を通じて初めて歴史が理解可能となるからである。(Antis: 407)

現代の我々の目には少々唐突に思われるが、クローチェはここで歴史は自由の歴史でしかあり得ないと断言している。その含意は後に詳説されることになるのだが、ともあれクローチェの自由主義はここに初めて宣言されていると言ってよい。そしてこの講演の内容は、早くも1932年に、哲学者樺俊雄によって日本に紹介される(樺 1932)。

クローチェが歴史としての自由主義を論じた著作のなかでは、なにより1932年に出版された『19世紀ヨーロッパ史』(*Storia d'Europa nel secolo decimonono*)が代表的なものと言えるだろう。『19世紀ヨーロッパ史』は、ナポレオン戦争から第1次世界大戦までを描いた歴史書でありながら、「自由の信仰 religione della libertà」と題された、「自由」概念を論ずる章から始まる。それはつまり、19世紀のヨーロッパの歴史上の出来事を語る作品でありつつも、同時に、あるいはそれ以上に、自由発展の歴史という一観点を提示する作品なのである。『19世紀ヨーロッパ史』が出版された頃(1932年)、イタリアではファシズムの支配が絶対化しドイツではヒトラー率いるナチ党が政権第一党となっていた。すなわちクローチェは、各国で個人が抑圧されていた時代に自由の価値を主張し、国家間での衝突が危惧されていた時代に統一体としてのヨーロッパを提起したのである。その限りでは、クローチェの自由主義は、個人主義と普遍主義の間を橋渡しする役割を担った思想だったと言ってよい。

1930年代は、日本においても国家権力による個人への情報統制が厳しくなっていった時代であった。マルクス主義は弾圧され、1932年に『日本資本主義発達史講座』を発表していた羽仁五郎も翌年治安維持法違反のかどで検挙されていた。彼は1933年に留置場を出たのち、ファシズムに対抗する意思を強くし、『マキャヴェリ君主論』（1936）や『ミケルアンジェロ』（1939）を通じて自らの意志を表明している。そしてこの流れから、1939年、「日本の中国侵略の戦争が第二次世界大戦に拡大されようとしていたとき」（羽仁2001:151）に出版されたのが、本稿冒頭に言及した『クロッチェ』である。

羽仁の『クロッチェ』は、1「市民的哲学者」、2「クロッチェ哲学の成長」そして3「現代におけるクロッチェ」の3章に分かれる。第1章「市民的哲学者」（羽仁1939:3-12）では、一般市民（「諸君」という呼びかけが多用されている）に向けられたメッセージが記されている。いわく、複雑な現代社会に生きる我々は、しばしば哲学者にその解明を求めるが、その期待は裏切られることが多い。というのも、哲学者はときに大上段に構え、「市民を上から見下して説教することを職業と」（羽仁1939:5）しているように感じられるからである。そこで羽仁は次のように言う。

そして、ここに、民衆の求むるパンとは、精密なる研究をもって民衆の生活の進歩に確信をあたえることである。そして、かくの如き思想家として、その稀なる一人として、ベネデト・クロッチェは、現代イタリア随一の哲学者たるのみならず、内外古今を通じ世界的の思想家としてイタリア及び世界の民衆に親しまれているのである。

クロッチェの書を読むと、一方では、専門哲学あるいは論理学また認識論また哲学史また方法論の最高の発達の状態をことごとくとりいれ、それにもとづいて更に高度の新問題解決にむかう精密の研究、すなわち、現代の世界の哲学界の最高の代表者が如何なる研究をなしつつあるか、如何なる見解を持しつつあるか、が、われわれにはつきりとわかると同時に、他方では、そのあいだから一般人としての諸君われわれの現代の複雑困難なる生活の現實に、動かすべからざる確信にもとづくよろこばしき希望があたえられて来るのである（羽仁1939:9）。

羽仁は、クロッチェが世界の哲学をリードする学者でありながら、庶民に開かれた思想家たりえていることを強調し、それ故、現代社会の問題に対する解決策を哲学者に求める者には、クロッチェを読むように、と推奨しているのである。こうした羽仁の語り口には、単なるクロッチェ紹介に留まらない、明らかなメッセージが読み取れると言えるだろう<sup>16)</sup>。

羽仁は第2章「クロッチェ哲学の成長」に、クロッチェ哲学の1930年代までの軌跡を素描している。とりわけ、『実践の哲学』、*Storia d'Italia dal 1871 al 1915*（『イタリア史、1871年から1915年まで』）、そして『19世紀ヨーロッパ史』の3作に多くの紙幅が割かれており、そこでは、明らかに「学問の独立」と自由主義という2つの側面が強調されている。例えば『イタリア史』



では、「民族國民」が特定の使命を抱くべきだとする当時の風潮にクローチェが反論し、「理論と実践とはそれぞれその自主」（羽仁 1929: 108）を守るという哲学的信念に裏付けられて、「学問の独立」の原則を順守している様が強調されている。そしてなにより『19世紀ヨーロッパ史』は、自由の啓蒙書として紹介されている（「この書の如く自由の不朽の意義を力強く明らかにしているものは、現在哲學者の思想の中でたぐいまれである。」羽仁 1939: 111）。

第3章「現代におけるクローチェ」においては、「現代」すなわち 1930年代のクローチェの自由主義に関連する発言（「反歴史主義」を含む）がまとめられている。そこに描かれているのはクローチェその人というよりは羽仁の目を通した自由主義者クローチェの姿であるが、それでもなお、感動的なものである。例えば羽仁は、1937年にアメリカの「New Republic」誌に掲載されたインタビューから次のようなクローチェの文句を引用している。

けれども、倫理的、智的、また政治的などの問題は、雨や晴の天候のように、我々の外にあるものではない。それらはわれわれの内部にある問題である。してみれば、それらについて何が起こるだろうか起らないだろうかということをはっきりとみることは意味をなさないのであって、唯一の正しい方法は、われわれのひとりびとりが自からはたらいて、それらをおのおのの良心と見識と自己の能力とにしたがつて解決するよりほかないのである。（羽仁 1939: 154）

これらの力強い言葉は、クローチェの個人主義を鮮明に表している。そしてその個人主義は、全体主義のもつ抑圧的傾向に抗う自由主義と同義のものである。

しかし、また、われわれは起こり得べき最悪の場合をも見とおしておこう。想像せられるべき最悪の場合とは、今日世界にあれくるつていいる闘争がついにいままで権威主義などに感染していなかつた國々さえにおいて自由の敗北そしていわゆる「全体主義」の類の権威主義の勝利におわるとゆうようなことが起つたばあいであろう。よろしい、それは人生の劣敗を意味する。しかし、その際にも、そこから自由の過程は必然的にふたたび新たにはじまり、一時破られはしたが將來においてはついに勝つであろうところのあのさまざまな力を地盤として再生を開始するであろうことは、また確實にしてうたがいのないところである。（羽仁 1939: 160）

ファシズムの支配下にあるイタリアを生きながら、歴史に裏付けられた確信をもって、クローチェは、自由主義の勝利を宣言している。そして、これは同じく軍国主義の圧政に苦しむ当時の日本人にも、深く響くものでありえた。

## 5. 自由主義者のよりどころとしての『クロオチェ』

羽仁の『クロオチェ』は、第2次世界大戦下の日本で、様々な人に読まれた<sup>17)</sup>。まず挙げるべきは、第二次世界大戦下に軍国主義に敢然と立ち向かった自由主義者として知られる河合栄次郎であろう。東京帝国大学経済学部の教授であった河合は、ファシズム批判を公然と行った一連の著書を発売禁止にされ、またそれがきっかけで大学を休職し、ついに1939年に東京地方裁判所検事局に起訴されてしまう（松井 2009: 301）。河合は、1941年の日記に以下のように記している。

しかし二日間寝て暮らしたが昨夜十一時半ごろから一時半までで読み終わった「クロオチェ」は近頃ない感激を受けた。なんだか公判の自分を鞭打っているような気がした。  
(河合 1969: 156)

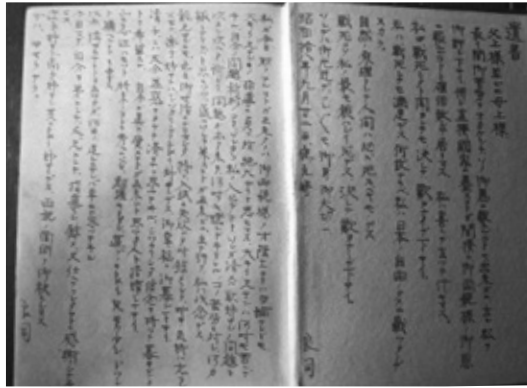
ファシズム圧政の最大の犠牲者であった河合が、前章に確認したような羽仁とクローチェの言葉を読んで感銘を覚えていたことは想像に難くない<sup>18)</sup>。この時期にはさらに、社会学者阿閉吉男が羽仁五郎と樺俊雄の影響下にクローチェの『実践の哲学』を翻訳している。

さて、羽仁の『クロオチェ』の影響を検証するにあたり、本稿冒頭に紹介した『きけ わだつみのこえ』に収録された2枚の手紙に戻ろう。吉村が「学問の独立」に関して、上原が「自由主義」に関して、それぞれクローチェの思想に感銘を受けていたことは既に確認したところである。これはすなわち、我々が見てきたところの、『クロオチェ』に込められたメッセージであり、彼らはこのメッセージが十分感じ取っていたと言ってよいだろう。しかし、羽仁の『クロオチェ』をめぐる物語はまだ終わらない。実は、『きけ わだつみのこえ』にはもう一枚、上原の遺書が収録されている。

私は明確にいえば自由主義に憧れていました。日本が真に永久に続くためには自由主義が必要であると思ったからです。これは馬鹿な事に見えるかも知れません。それは現在日本が全体主義的な気分にも包まれているからです。しかし、真に大きな眼を開き、人間の本性を考えた時、自由主義こそ合理的になる主義だと思います。(日本戦没学生記念会 1982: 14)

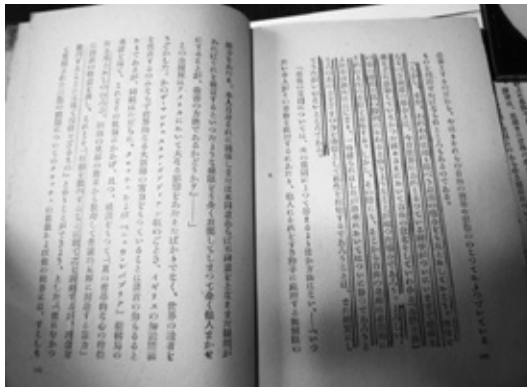
戦時下の日本で、しかも軍隊の中で行動していた人間の言葉としては、特異なほどに力強い表現とあってよいだろう。明らかに、クローチェの——そして羽仁の——確信に満ちた自由主義が反映されている。

さて、本稿冒頭にも確認したが、上原は羽仁の『クロオチェ』を遺本としている。その見返しには両親に宛てられた第3の遺書がある（写真2参照）。



[写真2] 上原良司の遺本『クロオチェ』見返し

本文には大量の書き込みや下線があり、これらを辿ることにより上原の読書を追体験できる。例えば前章の末尾に引用した「しかし、また、われわれは」に始まる一段落が、全ての行に赤い二重線が施されており、上原の感激具合が窺える（写真3）。

[写真3] 上原良司の遺本『クロオチェ』160ページ<sup>19)</sup>

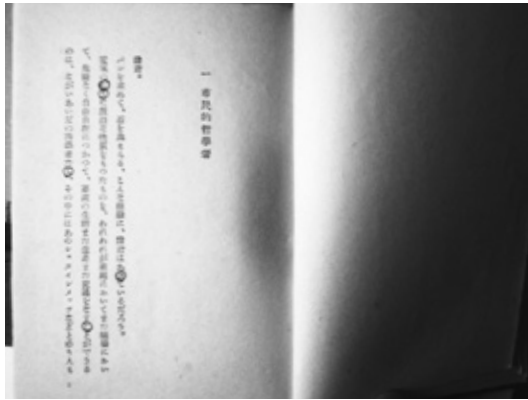
しかしそれだけではない。この遺本にはさらに一つの仕掛けがある。実は、第3ページから第51ページにかけて、数十個の文字が○で囲まれている（写真4参照）。これらをつなげると、次のような文章が浮かび上がる（ただし第1行「僕」は上原が書き加えたもの）。

きようこちゃんさようなら僕はきみがすきだつたしかしそのときすでにきみはこんやくの人であったわたしはくるしんだそしてきみのこうフクをかんがえたときあいのことばをささやくことをダンネンしたしかしわたしはいつもきみおあいしている

これは、初恋の女性石川冷子への恋文である<sup>20)</sup>。冷子が婚約をしてしまったため、上原は自らの恋心を告白できなかった旨を述べている。

以上を見ると、上原の遺本には、クローチェ読書によって生じた感動と、両親への遺書と、そして初恋の相手への告白とが、全て一緒くたになって込められていることが分かる。羽仁の『ク

『クロオチェ』の最も不可思議な運命が此処にあると言ってよいだろう。当のクローチェも、自らの思想を解説した書物が、特攻隊員の遺本となってしかも愛の告白の媒体になるだろうとは、想像だにしていなかったはずだ。



〔写真4〕上原良司の遺本『クロオチェ』3ページ

#### おわりにかえて

以上本稿では、羽仁五郎の仕事を参照点に据えつつ、第2次世界大戦下の日本におけるクローチェ思想の受容プロセスの一端を見てきた。最後に、クローチェ自身が羽仁五郎と『クロオチェ』に対して示した反応を見たい。クローチェは、終戦後の1946年、自ら主宰する「*Quaderni della "Critica"*」という雑誌に、「日本の友達の思い出と手紙」という記事を発表した。そこでは、クローチェの、数人の日本人との直接・間接の交流について語られているのだが、その冒頭と末尾でまさに羽仁五郎が言及されている<sup>21)</sup>。クローチェは、1926年に羽仁が『歴史叙述の理論と歴史』を翻訳してから1939年に『クロオチェ』が出版されるまで、両者の間に手紙のやり取りが幾度もあったことを述懐している。羽仁から『クロオチェ』を贈られたクローチェは、日本語で書かれたこの作品を読むことは当然できなかったが、「本を読まなくても、我々の間で共有されている感情と理念に鑑みるならば、少なくとも本質的な部分については、述べられている内容が理解できるように思えた」(RLAG: 103)と述べている。「老いたナポリ人と若き日本人」の間には、「距離の感覚も、差異の感覚も、異国の感覚も、全くなかった」(RLAG: 103)というのであった。

しかし、世界大戦は2人の関係を引き裂いた。クローチェは、「羽仁五郎に返信したが、私の手紙が彼に届かなかったか、あるいは彼の返信が私に届いていない」(RLAG: 111)ののだろうと悲しみ交じりに述べている。だが我々は今、実際にはクローチェの手紙が羽仁に届いていたことを知ることができる。羽仁は自伝に記している。

日本の敗戦によってぼくが鉄窓を出たとき、ぼくが最初に受け取った外国からの郵便は、クローチェからの手紙であった。(羽仁 2001: 152)

## 参考文献一覧

[クロアチアの著作]

Croce Benedetto,

略号

Antis *Antistoricismo*, in «La Critica», vol. 28, Bari, Laterza, 1930.RLAG *Ricordi e lettere di amici giapponesi*, in «Quaderni della "Critica"», n. 5, Bari, Laterza, 1946.SdE *Storia d'Europa nel secolo decimonono*, a cura di Giuseppe Galasso, Milano, Adelphi, 1991.TSS *Teoria e storia della storiografia*, a cura di E. Massimilla e T. Tagliaferri, Napoli, Bibliopolis, 2007.TLII *Taccuini di lavoro II 1917-1926*, Napoli, Arte tipografica, 1987.TLIII *Taccuini di lavoro III 1927-1936*, Napoli, Arte tipografica, 1987.

[参考文献]

Galasso, Giuseppe, *Nota del curatore*, in B. Croce, *Teoria e storia della storiografia*, Milano, Adelphi, 1989, 399-427.

石井孝『近代史を視る眼』吉川弘文館 1996年

稲邊小二郎『一輝と吟吉 北兄弟の相剋』新潟日報事業者 2002年

上原良司(中島博昭編)『あゝ 祖国よ 恋人よ』信濃毎日新聞社 2005年

植村和秀「歴史学者平泉澄(二・完)」『産大法学』38巻1号 2004年 pp.42-72

亀岡敦子「特攻隊員・上原良司が問いかけるもの」, 『いま特攻隊の死を考える』, 岩波書店 2002年 pp.32-43.

河合栄次郎『河合栄次郎全集第二十三巻』社会思想社 1969年

樺俊雄「クロアチア『反歴史主義』, 『理想』, 6年30号 1932年 pp.164-167

北吟吉『哲學行脚』新潮社出版 1926年

北原敦『イタリア現代史研究』岩波書店 2002年

國司航佑『詩の哲学』京都大学学術出版会 2016年

倉科岳志『クロアチア 1866-1952』藤原書店 2010年

小林孤村「クロアチアの歴史論」, 『國學院雑誌』, 28巻・11号 1922年 pp.15-39

日本戦没学生記念会(編)

————『きけわだつみのこえ』岩波書店 1982年

————『第二集 きけわだつみのこえ』岩波書店 1988年

羽仁五郎

————『クロアチア』河出書房 1939年

————「譯者の言葉」クロアチア『歴史の理論と歴史』岩波書店 1975年

————『私の大学』日本図書センター 2001年

平泉澄『平泉博士史論抄』青々企画 1998年

ハルトゥーニアン, ハリー「歴史のアレゴリー化」, 『マルクス主義という経験』, 青木書店 2001年 pp.227-260

松井慎一郎『河合栄次郎—— 戦闘的自由主義者の真実』中央公論新社 2009年

三木清

————『歴史哲学』岩波書店 1932年

————『三木清全集』第6巻 岩波書店 1967年

若井敏明『平泉澄』ミネルヴァ書房 2006年



## 注

- 1) 羽仁五郎の著作の原題は『クロオチェ』（「オ」ではなく「ォ」）となっている。ただし、自伝では羽仁自身が「クロオチェ」と記している。
- 2) Croce のカタカナ表記は「クローチェ」、 「クロオチェ」 等があるが、戦後はほぼ「クローチェ」で統一されており本稿もその慣習に従うこととする。ただし、引用に関しては原文の表記をそのまま示す。
- 3) 本稿の目的は日本においてクローチェ思想が及ぼした影響に考察を加えることにあり、クローチェ思想そのものを詳しく論じることはできない。クローチェ思想の全体像を知りたい向きは倉科 2010 や國司 2016 を参照されたい。
- 4) 本稿では、クローチェ美学の受容についての議論を行うことができなかった。簡単な紹介は拙著（國司 2016: 16-21）にもあるが、掘り下げた議論は稿を改めて行いたい。
- 5) 1926 年にクローチェに送られた手紙（写真 1）のうちに「あなたはだいぶ前から私の学問の心の師です」（*da molto tempo ella è il maestro del mio spirito nel mio studio scientifico*）とあるから、羽仁はもう少し前からクローチェ思想に触れていた可能性がある。
- 6) この手紙は、1946 年にクローチェが発表した「日本の友達の思い出と手紙 *Ricordi e lettere di amici giapponesi*」という記事のうちに掲載されている。
- 7) この手紙は、現在ベネデット・クローチェ図書館財団（*Fondazione Biblioteca Benedetto Croce*）に保管されている。
- 8) 『歴史叙述の理論と歴史』の出版事情については、Galasso 1989 に詳しい。
- 9) ただし、その後羽仁は「原稿を書きなおし」（羽仁 2001: 180）ているため、和辻がクローチェを「理解できなかった」のは単に訳文の問題であったかもしれない。
- 10) 『歴史叙述の理論及び歴史』の序文にその旨が記されている（羽仁 1975: 8）。
- 11) 平泉は、ドイツ語版、英語版、イタリア語版の 3 版を参照しつつ翻訳を進めた羽仁の「その原義を失はざらんとする忠実と、洗練倦むを知らざる熱心」（平泉 1998: 62）を称えている。
- 12) クローチェもまた、平泉（「私の理論を勉強し、著述や講義に役立っている、東京大学の日本人教授」）の来訪を『研究手帳』に記録している（TLIII: 220）。
- 13) 例えば、羽仁五郎の「東洋における資本主義の形成」が学術誌に掲載されることに平泉が異議を唱えたといわれている（石井 1996: 16）。
- 14) 実はこの時期にクローチェの影響を受けた日本人の中には、北一輝の弟の北吟吉もいる。北吟吉はクローチェ作品に感化され、1920 年 3 月 19 日にナポリのクローチェ宅を訪問している（渡邊 2002: 132-133, TLII: 150）。ただし、吟吉は 1932 年にイタリアを再訪しているのだが、その際には、ムッソリーニやジェンティーレに会見しており、この間にクローチェとの政治的立場の懸隔が生じていたのかもしれない。
- 15) 北原敦は、1923 年のインタビューを取り上げて「この時期のクローチェは、政治思想としての自由主義については何らの関心もはらっていない」（北原 2002: 23）ことを説明している。
- 16) しかもこれは、見ようによっては、若い世代の歴史学者に向けて「クロオチェを読め」と促した平泉の言葉に類似している（本稿第 3 章を参照のこと）。イデオロギーの相違から袂を分かった 2 人の歴史家が、それにも拘わらず根底に似たものを保持し続けていることを示しているようで興味深い。
- 17) 羽仁の『クロオチェ』は、1942 年、初刷からたった 2 年強で、第 6 刷になっている。
- 18) 『クロオチェ』が河合に与えた影響については、羽仁本人も言及している（羽仁 2001: 151）。
- 19) 上原良司の遺本を調査するにあたり、ご遺族の清子様と幸一様から全面的なご協力をいただいた。ここに記して謝意を表する。
- 20) 人物の特定は、上原 2005 の中の中嶋の解釈に依った。

- 21) 他には、経済学者大西猪之介、文学者下井春吉、羽仁の伝言役を買って出た久保貞次郎などがある。

付記 本研究は、平成28～30年度科学研究費若手研究（B）「『歴史の現代性』と『芸術の普遍性』——クローチェ思想を読み直す」（研究課題番号16K21469）および平成28年度京都外国語大学学内研究員研究費を受けておこなわれたものである。

